

⇒ をクリックすると本文がご覧になれます。

⇒ 本は読むもの？ それとも書くもの？

長谷川 孝徳  
(未来創造学部教授)

⇒ 本を通しての無限の可能性

遠藤 愛実  
(薬学部 薬学科 3年次生)

⇒ ライブラリーセンターについて

山田 洋太  
(未来創造学部 未来社会創造学科 1年次生)

⇒ ライブラリーセンターについて

ロ 章  
魯 章  
(未来創造学部 未来社会創造学科 3年次生)

⇒ 図書館のアルバイトをして学んだ読書の意義

リュウ タイジヨウ  
劉 泰丞  
(未来創造学部 未来文化創造学科 4年次生)

⇒ 本を読みたい人、借りたい人の気持ちを考えながら

テイ ヨウ  
丁 暉  
(未来創造学部 未来社会創造学科 4年次生)

⇒ 2007年度私立大学図書館協会西地区部会  
京都地区協議会研修大会の開催

⇒ 読書コメント大賞

# HOKURIKU UNIVERSITY LIBRARY CENTER

北陸大学ライブラリーセンター報



## 本は読むもの？ それとも書くもの？

未来創造学部教授 長谷川 孝徳



「小諸でてみる浅間の山に けさも煙が三すじ立つ」

「浅間山さん なぜ焼けしゃんす 裾に三宿 もちながら」

江戸時代から、信濃追分で一夜を明かす旅人たちを相手に、飯盛女たちが付近の馬子唄を聞かせたという信濃追分節。この民謡にもあるように、今日は浅間山の煙を見ながら、追分宿からの出発である。

この文章は、以前ある雑誌に連載していた紀行文の一節である。連載1回分が4,000字～5,000字ほどであった。月刊誌で2年間連載したから、24話書いたことになる。論文や研究ノートを書くのと違い、風景や人々とのやりとり、その心情を書くことの難しさを思い知ったものである。そして、なによりも不特定多数の方々に読んでもらう、いや、読んでいただける文章を書かなければならないという、学術論文などとは違う緊張感も味わった。出版社から依頼を受けて書き始めたものの、毎回、現地を歩き取材をして文章を書くということを繰り返すうち、1ヶ月という時間の短さを痛切に感じたものである。

この雑誌連載の他には、かつては新聞連載、あるいは共著や単著で何冊かの本も書いていた。特に大河ドラマ「利家とまつ」の頃は、週刊3本、月刊1本、その他特集ものなどの臨時の出版物の依頼があったから、仕事が終わった夜から朝にかけて原稿を書く（当時はパソコンに向かう）毎日だった。

こうした経験から、私の読書に対する姿勢は大きく変化した。以前は濫読し、つまらないものは途中で放り出し、文章の表現法を批判し、作者に対してあれこれと評したものであった。また、つまみ食いならぬ「つまみ読み」もしていた。学術論文の場合は、学説に対して批判することもあれば、論評することもある。しかし、一般書物にまでそうした目で読んでいた自分が、それまでそこにはあった。

ところが、雑誌や一般書、あるいは新聞連載やコラム欄を書くうちに、本を読むときに単に内容を読むだけでなく、いわゆる「行間を読む」ようになった。また、紙数の制限の中で端的に書いてある表現力、まるで目の前に繰り広げられるがごとく立体的に書かれた描写、読者に分かりやすくしようと選ばれた語句、技巧に走らない素朴な文章など、作者の苦労や気持ちを察するようになったのである。

さて、文章を書くということは、いろいろなことを調べなければならない。そのためには必然的に読書することになる。例えば冒頭の文章の場合、信濃追分から出発するので、信濃追分節を使った。当然、その文言が分からないから調べなければならない。『民謡全集』などで歌詞を読んでみたり、さらに浅間山を眺めながら歩くと、次には浅間山について調べなければならない。で、浅間山については以下のような記述となった。

「その火山灰をもたらした浅間山は、三重式の活火山である。コニーデ（成層）型のなだらかで美しい山容は、信濃路最大のシンボルとして親しまれてきた。浅間山の魅力は、姿の美しさもさることながら、そのしなやかな山塊の底に秘められた、煮えたぎる溶岩の、血潮のようなダイナミズムにあるのではないだろうか。景色をとらえる日本人の感性は、あるときは絵になり、あるときは文学として表現された。この2,542メートルの浅間山などは、その感性を刺激する格好の素材だったのかもしれない。」

実物の浅間山を眺め、四季の浅間山が掲載された写真集を見て、火山に関する書物や浅間山について書かれた本を読むことにより、こうした文章に至ったのである。読書と著書は表裏一体の関係である。

わずか1行を書くために、作者がどれだけの取材をしたのか、情報を得ようと努力したのか、行間を読むことも読書の楽しみである。このことは、文章を書いて初めて分かる読書の楽しみ方なのかもしれない。



## 卒業記念図書



本学卒業生からの卒業記念品として、以前は絵画や彫刻などを寄贈していただいておりますが、平成17年度以降の卒業生からは、図書を寄贈していただいております。

本学では、単に専門分野の知識のみを修得するのではなく、より深い思考と視野に立った考え方の育成に取り組んでいますが、その際、昨今の希薄な人間関係を憂い、愛情に満ちた人の痛みが分かる豊かな人間性を身につけるべく、卒業生から贈られた哲学、歴史、自然科学、芸術、文学などの教養書は、本学学生にとって大切な財産となっております。

平成17年度の卒業生からは1,152冊、平成18年度の卒業生からは1,193冊を寄贈していただきました。これらの図書は、「卒業記念寄贈図書」として、薬学部卒業生からの寄贈図書は薬学部分館（本部棟2階）レコードミュージアム室に、外国語学部及び法学部卒業生からの寄贈図書はライブラリーセンター本館1階に配架されており、在学生の学習及び卒業生や一般の方々の生涯教育に利用されています。



ライブラリーセンター本館



ライブラリーセンター薬学部分館

## 利用学生の声

### 本を通しての無限の可能性

薬学部 薬学科 3年次生 遠藤 愛実



読書が人格形成や学力向上につながると思っている教育熱心な人達がいる。なぜ、読書が推奨されるのであろうか？私はそんな疑問を抱いたことがある。

もともと私の読書は唯の暇つぶしの娯楽である。生来の怠け者であり、体を動かすより心せわしいのを選んでしまう。本なんか読まなくてもすることは山程あるのに、またゴロンと横になって本を読む。

最近ドラマ化された東野圭吾の『探偵ガリレオ』も、寝ころがったまんま目だけキョロキョロさせて心の中でキャーキャー喜んで読んだ。ドラマの俳優も、その世界の風景も、読者の勝手な想像によって動かされる。また、数年前にドキュメンタリー番組で話題になった大平光代弁護士の『だから、あなたも生きぬいて』を読めば、感動したり感心したり、悔しさを噛み締めたり、尊敬してみたり、随分安上がり出来る。レイチェル・カーソンの『沈黙の春』の世界の中に入って、約半世紀前の警告に深遠な気分になってみたりもするが、不謹慎にもSF映画などを見てワクワクしている感覚に陥る。

マンガもテレビも大好きなのだが、それらとは違い、活字はイメージを読者が勝手に決定付けることができる。感想や意見も持つ。不思議なことに、他の媒体は見えても楽しいのだが、見る側という立場があまりないように思う。

ある日、改装された薬学キャンパスの図書館に行くと、人生読本と銘打った小さなパンフレットが置いてあった。1ページ目に「読書は、自分探しのためにも有効です。」とある。私が思うに、著者は考え抜いた思いを読者に語りかける。読者は、自分だったらこうするのに、とか、その気持ち分かる、などと勝手な意見を持つ。大学生の今、目の前には無限の可能性があり、自分が何者なのか、何をしたいのかなんて分からないが、感想や意見を持つことによって自分の立場がおぼろげながら分かったような気になる。おまけに安っぽい安心感まで手に入れることが出来るのではないかと思う。

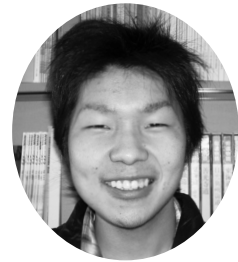
ところで、先に述べた本は全て薬学キャンパスの図書館で借りた本である。私は初め、この図書館には専門書しか置いていないのだと思っていた。よって、単に自習スペースやパソコンでやらなければならないことを処理するためだけの目的で利用していた。しかし、背丈より高い本棚にぎっしりと詰まっている本をよく見ると、面白い本が多数眠っていた。努力も娯楽も共存する空間の無限の可能性を思うと、吸い込まれそうな感覚に陥った。

また、読みやすくて面白い本を見つけたので読書コメント大賞に応募した。読書感想文というよりコメントなので、帰省の電車の中で携帯電話のメモ機能を使い、大変気軽に作成した。そして、テスト期間真っ只中の月ならライバルも少ないだろうと思い、不真面目な作戦により月間賞を頂くことが出来た。味を占めた私は、これからも時間を見つけて読書を続け、あわよくば月間賞の図書カードをもらうために読書コメントを書き連ねていこうと思っている。こんなに気軽に応募することによって、面白い本が紹介され、数人でもコメントに目をとめて、読書が広がっていけばいいと思う。

図書館には一人ひとり無限の利用方法がある。せっかくの図書館を利用してはいかがだろうか。

## ライブラリーセンターについて

未来創造学部 未来社会創造学科 1年次生 山田 洋太



入学して以来、よくライブラリーセンターを利用しますが、その多くは授業に関する学習と、自習をするためです。そして、本学のライブラリーセンターはとてもよい施設だと思います。

「図書室」というのは小学校・中学校・高等学校に、それぞれありました。しかし、これらの中でコンピュータを使用できたのは高等学校だけでした。しかも、たったの1台だけです。その上、どんな本が出版されているのかということのみを検索できるもので、その他のことを調べることができませんでした。

大学のライブラリーセンターは独立した図書館です。図書室ではありません。そうしたことから、今までとは違った素晴らしい施設と思えるのです。ライブラリーセンターでは図書のみならず、DVDやビデオなども借りることができます。さらに、館内のコンピュータを利用して、これらを見ることができます。もちろん、無料です。コンピュータの台数も利用方法も高等学校時代とは比較になりません。

ところで、自分は中国語を履修しています。そのため中国語の学習をするのですが、非常にたくさん本があり、大変役に立ちます。そして、中国語の他にも横には法学検定や英検など様々な対策本も揃っているのです。中国語検定に向けて勉強している自分にとっては大変助かります。

未来の学生も薬学の学生も、ライブラリーセンターの図書利用だけではなく、さまざまなサービスを受けることができることを、もっと知るべきでしょう。ライブラリーセンターを自分のために使用しない学生は、自分にとって損をすることになると思います。是非、多くの学生に利用して欲しいと思います。

一方、ライブラリーセンターの利用時間についてですが、現在は平日が9:00~19:30で、土・日曜日と祝日は9:00~17:00です。平日は、できれば8:00から利用でき、夜は21:00まで、土曜日と休日は19:00ごろまで利用できたらいいなあ、と思います。また、利用するにあたって、映画のDVDが借りられることを最近知ったので、サービス内容の宣伝を学生にもっとアピールした方が、より利用されるのではないかと思います。そして、借りたいDVDがすぐに見つけられるように、リストを50音順に並べ、同じタイトルでもシリーズになっているものは一つに省略してもよいと思います。

さて、ライブラリーセンターの空間利用ですが、4階にはあまり学生の姿が見られないので、自習専用の空間にすると、講義と講義の空き時間に利用しやすくなると思います。より多くの学生がライブラリーセンターを利用することで、充実したライブラリーセンターづくりにつながると思います。

最後に、ライブラリーセンター主催の読書コメント大賞や読書感想文コンクールがありますが、講演会などもぜひ行ってもらいたいと思います。授業と違う視点で、本からの知識などを話してもらえると面白いと思います。



## ライブラリーセンターについて

未来創造学部 未来社会創造学科 3年次生 **魯** **章**



北陸大学のライブラリーセンターに対して、私はずっと感謝の気持ちを持っています。

なぜかという、日本へ来たばかりの時にライブラリーセンターのパソコンがとても役立ったからです。来日後間もない頃は、何事もわからなかったうえに、携帯もパソコンも持っていませんでした。異国で始まった新しい生活に期待をしながらも、自分の心の中にはささやかな不安もありました。特に最初の2週間、入居したばかりの部屋の中には何もありませんでした。蒸し暑い夏休みに、家具などの用意のために自転車であちらこちらに行ったり、学校では補習もあったり、生活のペースにも慣れなかったりなど、本当につらいなあと思いました。そんな時、ライブラリーセンターのパソコンでネットを通じて母国にいる友達とチャットをするのは、自分にとってつらい生活の中の唯一の慰めだといっても過言ではありませんでした。もしあの時、ライブラリーセンターのパソコンがなければ、きっと、もっと辛くなったことでしょう。なんと言っても、私は1日でもネットをしないと、苛立ちやすいタイプなので、大学のライブラリーセンターに対しては、本当にありがたい気持ちでいっぱいです。

それに、何よりもこちらのパソコンが無料で使えることは一番うれしいことです。こういうことを書いたら、笑われるかもしれませんが、私の国の大学（西安外国語大学）では、パソコンを使うためには、プリペイド・カードを使わなければならないのです。だから、そんなことに慣れていた私には、初めてライブラリーセンターのパソコンが自由に、しかも無料で使えるということに、ちょっと儲けたなあというような感じを持ちました。

もちろん、ライブラリーセンターというところは、決してパソコンで遊んでばかりいるところではありません。図書館です。図書館ですから、たくさん本があるのは当然なこととなります。よく北陸大学のライブラリーセンターの蔵書は少ないというような意見を耳にしました。個人的には、確かに北陸大学のライブラリーセンターは他の大学の図書館に比べると、蔵書がそんなに多くはないと思います。それについては、北陸大学のライブラリーセンターはそんなに大きくないので（始めてライブラリーセンターに入った時にはなんと可愛い図書館だと思いました。）、空間の制限により仕方がないことだと思います。ですから、そう考えたら、逆に結構本があるのではないかと思います。極端な言い方ですが、この大学で4年間勉強している間に、ライブラリーセンターにある全ての本を読み終える人はまずいないでしょう。全部を読む必要はありませんけど…だから、本が少ないかどうかということは、それを利用する人次第であると思います。

それにもう一つ、ライブラリーセンターに中国語の本があり、とてもうれしく感じます。大学の図書館なら、きっと外国語の本があるに違いないとは思いましたが、実際にその場で自分の国の本を見つけた時の親しみ深さは、自ら体験してみないと理解しがたいものです。

こんな可愛いライブラリーセンターですから、ここで本を読んだり、自習したりできるということは、本当に気持ちのいいことだと思います。だって、北陸大学のライブラリーセンターはとてもきれいで静かなところだから・・・

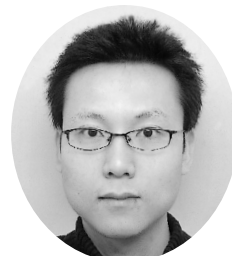
読書や勉強には非常にいい環境です。私は、ライブラリーセンターの2階と3階の左側の閲覧室が大好きです。なぜなら、太陽の光が大きな窓ガラスを通して注いできて、とても明るく暖かくてきれいなところだからです。そこで太陽の光を浴びながら本を読むことは、すごく幸福感に包まれます。もし長く読み続けて目が疲れたとしたら、ちょっと頭をあげれば窓外の美景がすぐ目に入ります。その度に、私はいつも、ささやかな幸福感を覚えます。

中国には「本が知識の海洋である」という言葉があります。そうすると、こういう知識の海洋を収容している北陸大学のライブラリーセンターは、とても素敵なおとところだと私は思います。北陸大学にいる、あと僅か1年の間に、このライブラリーセンターの書籍で自分をもっと充実させることができればいいなあと思っています。

## アルバイト留学生の所感

### 図書館のアルバイトをして学んだ読書の意義

未来創造学部 未来文化創造学科 4年次生 リュウ タイジョウ  
劉 泰丞



子供の時から本が嫌いだった。真面目な本どころか、皆が面白いと言って読んでいる小説ですら読む気にはならなかった。「よし、頑張って一冊を読みぬこう!」と決心しても、自分の記憶の中では、大学3年次生までに、最初から最後まで読み通した本は一冊も無かった。そんな私だった。

ところが、図書館のアルバイトをしてから、毎日いろいろな本と出合うことになった。新しく入ってきた雑誌の受け入れをしたり、学生が返却した本を本棚に戻したり、整理したりする。学生が返却してきた本をチラッと見て、「あっ、これ面白い!」と思ったこともよくある。そうしているうちに、だんだん、自ら進んで本を読むようになった。ついに大学3年次生の時、人生で初めて、まるまる1冊、本を読み通すということを達成した。しかも「なるほど、ここが素晴らしいのか」と、皆がこの本を素晴らしいと言う理由を初めて理解することができた。それは、今までに経験したことのない、高揚した気分だった。

この経験から、一つ大切なことを学んだ。それは、「なるべく多くの本と出合うこと」だ。私ほどではないにしても、あまり本を読むことが好きではない人がこの時代にたくさんいると思う。でも普段本を読まない人でも、図書館にある本を手にとって読んでいけば、いつか自分の好きな本と必ず出合えるはずだ。数多くの本との出会いを通して、読書が好きになり、そのうちもっと本を読みたくなると思う。これは、本のあまり好きでない人には、是非試してほしい。

### 本を読みたい人、借りたい人の 気持ちを考えながら

未来創造学部 未来社会創造学科 4年次生 テイ ヨウ  
丁 曄



去年の3月から図書館でバイトを始め、もうすぐ一年になる。この中で、何を学んだかという、「責任」ということである。図書館のアルバイトを始めた頃は、本の貸し出し、返却、レコードの登録などの仕方を習うばかりで、どうしてこうするのかということ一度も考えたことがなかった。ところが、ある日、まだわからないことを先輩に尋ねたところ、「こうすると、他の人が本を探す時に便利になるわよ!」と教えてくれた。その時初めて、私は図書館が本を借りたい人のために利便性を提供する所であることを認識した。単に本の貸し出し方法を習うだけではなく、何をやるにしても図書館を利用する人の利便性に繋がるかどうかを考えなければならない。

図書館でのアルバイトはあまり頭や体が疲れることはないけれど、本を読みたい人、借りたい人の気持ちを考えながら、ちゃんと責任を持ってまじめに行わなければならない。これは、アルバイトであっても、通常の仕事であっても、どこでも、きっと同じではないだろうか!

## 2007年度私立大学図書館協会西地区部会 京都地区協議会研修大会の開催

平成19年10月12日（金）に2007年度私立大学図書館協会西地区部会京都地区協議会研修大会が開催されました。この研修大会は、加盟館の発展と相互協力を図るため、年1回開催されるもので、今年が会場校となりました。研修大会には、16校21名の参加をいただきました。

「加賀百万石の歴史と文化」のテーマのもと、本学未来創造学部の長谷川孝徳教授の講演及び珠姫の菩提寺である天徳院の見学を行いました。

大桑和雄ライブラリーセンター長の挨拶に続いて、『城下町金沢』及び『大江戸単身赴任事情』という2つの講演が午前と午後に分けて行われました。城下町金沢の歴史、参勤交代、江戸での単身赴任事情等の実話及び裏話が紹介されました。教科書や歴史書には載らない、金沢生まれの私たちも知らないような話題がたくさん盛り込まれ、参加者の方々も興味津々と聴き入っていました。

引き続き、加賀藩の礎を陰で支えた珠姫の菩提寺である天徳院の見学を行いました。珠姫は徳川二代将軍徳川秀忠の次女として生まれ、加賀藩三代藩主前田利常の正室となりました。3才で輿入れの後、前田、徳川両家の融和のために心を尽くされましたが、四女夏姫出産後24才の若さで生涯を終えました。

天徳院では、からくり人形「珠姫・天徳院物語」を鑑賞し、珠姫が加賀百万石の危機を救いその繁栄に尽くした良妻賢母、日本女性の鏡として今も金沢市民に敬愛され親しまれていることを十分に理解することができました。



長谷川孝徳教授講演  
(於：コミュニティハウス)



天徳院見学

※写真の山門は、平成19年12月25日  
石川県文化財に指定されました。



寄 贈 図 書

本学の教職員から、下記のとおり図書の寄贈がありました。紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

書 名	寄 贈 者
青年期からの健康・運動科学 改訂第4版 2冊	佐野 新一（教育能力開発センター教授）

読書コメント大賞

平成19年5月から募集を開始した「読書コメント大賞」には、平成20年1月末までに、全部で90作品の応募がありました。年間優秀賞は、次号のライブラリーセンター報で発表します。引き続き、平成20年度審査分の募集を行っています。皆さんからのより多くのコメントをお待ちしています。コメントを読んだ人が、『これ、面白そう！』と読みたくなるようなコメントを歓迎します。

編 集 後 記

北欧の神話には、“トール”という力の強い雷神が出てきます。日本で怖いものといえば「地震、雷、火事、おやじ」という順番ですが、地震のほとんどない北欧では雷神が第一番にくるようです。

書物を通じて世界各地の昔からの物語に容易に触れることが出来ることも、図書館を利用する楽しみの一つなのではないかと思われます。

(柿木)

CONTENTS

	頁
1c 本は読むもの？ それとも書くもの？ ……………	1
1c 卒業記念図書 ……………	2
1c 利用学生の声 ……………	3
1c アルバイト留学生の所感 ……………	6
1c 京都地区協議会研修大会 ……………	7
1c 寄贈図書・読書コメント大賞 ……………	8

北陸大学ライブラリーセンター報  
NO.24

平成20年3月10日発行

編集・発行：北陸大学ライブラリーセンター  
〒920-1180 金沢市太陽が丘1-1  
TEL. 076-229-3021  
FAX 076-229-4850

ライブラリーセンターEメール：tlib@hokuriku-u.ac.jp  
北陸大学ホームページ：http://www.hokuriku-u.ac.jp/

印 刷：カンダ印刷株式会社